

緑友 だより

No. 18

全国印刷緑友会機関誌

東京都杉並区和田1-29-11 (社) 日本印刷技術協会

第12回 熊本大会報告

第12回熊本大会は、快晴に恵まれた去る10月25日、熊本市市民会館に21グループ137名の仲間を迎え、「今後の需要変化にいかに対応するか」を大会テーマとして開催された。

今大会はホスト・クラブの提案により、大会行事を中間にはさんで第1部と第2部に分け、午前9時30分、熊本プリンティング・クラブ角実行委員長の開会宣言のあと、すぐ第1部のパネル・ディスカッション「今後の技術の動向をさぐる」が行われた。

大会行事は午前11時から国家斉唱にはじまり、参加21グループの紹介のあと、ホスト・クラブ幹事長・橋本保正氏の歓迎のあいさつにつづき、大川幹事長が「今大会のテーマは、構造改善問題をいわば背後からとらえようと試みるもので、第1部のディスカッションは主として技術の動向から、第2部の分科会は経営的角度から、それぞれ大会テーマに帰納する形で実りある討議を期待したい」と挨拶した。つづいて熊本県知事・寺本広作、大日本図書会長・佐久間長吉郎、熊本県印刷工業組合理事長・白石豊の各氏から祝詞があり、さらに坂田文部大臣ほかの祝電披露のあと、白石前幹事長に感謝状と記念品の贈呈を行なった。なおこの後、千代田印刷新世会の入会が披露され、下谷新世会幹事



長の挨拶があったほか、印刷同友会・土井庄一郎氏から印刷博物館設置に緑友会として協力したいとする動議が提出され、具体的方策については常任幹事会で検討することとし、主旨に対しては満場拍手をもって承認した。

午後からの分科会は、「協業合併業務提携を中心として」他4部門に分れて討議が展開され、16時からは堀田善衛氏の記念講演「天草の乱」があって日程を終了した。なお18時からは会場を交通センター・ホテル大宴会場に移し、和やかな懇親会が催され、20時、名残りを惜しみつつ再会を約し、恒例の「おててつないで」の大合唱の中に散会した。ここに改めてホスト・グループ熊本プリンティング・クラブの皆さんに対し、心からお礼申し上げます。

パネル・ディスカッション

今後の技術の動向をさぐる — 文字を中心として —

司 会 文京緑友会 和 田 豊 氏

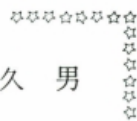
講 師 武 捨 久 男 氏
(日本経済新聞社技術部長)

パネラー 木 下 堯 博 氏
(九州産業大学助教授)

長 谷 川 泰 政 氏
(写真植字研究所)



講 師 武 捨 久 男



◇ 講 演 要 旨 ◇

新聞業にたずさわる者としての立場から、考えや体験を話してみたい。まず、情報産業の革新の激しさを身をもって体験しているところである。たとえば、直接的な部門の新聞印刷。5年前の社屋建設で、相当先を見越したつもりで24頁だての連続印刷の設計をしたが、すでに昨年で20頁の連結印刷を開始、5年もたたずに先を見越した設計に到達しつつあるという状況である。急激な変化はこと印刷部門ばかりではない。当時は新聞社がコンピューターを入れるなどは考えられもしなかったが、すでに(昨年)データバンクを目ざし稼動している。

こうした例ばかりでなく、新聞社自体の内状も変わってきているのである。つい最近も朝日新聞と松下電器のフォームファックスの発表があったが、全般に家庭と新聞社を結びとうとする勢いが強くなってきた。

当社(日経)も電波媒体への進出もすでに考えているし、出版部門も従来のサイドワークとしてでなく本腰を入れる姿勢をとっている(マグロー社との提携など)。いずれにしても印刷という記録産業は、今後も拡大していくことは間違いないと考える。新聞の場合でいえば、過日日本で開催された新聞の世界大会でも、「新聞は今後の激しい情報革命のなかでも残っていくであろう——」という見方がされた。ただし、

重要なことは、このままの形で残るといったことはないのであって「激しい変革がともなう」というただし書きがついている。新聞印刷の部門でいえば、今後は「印刷工場というのは分散化の傾向」をたどることはまちがいない。新聞印刷の工場が衛星工場化してくれば「一般の印刷業界と接触する」点がでてくる可能性が多くなるだろう。新聞社というものの経営姿勢が、必然的に、新聞印刷工場と一般印刷的な混合した形の業態を必然的にとらざるを得なくなるだろうと考えている。

技術革新と一般印刷への影響

つぎに、新聞社における技術革新の方向というものについてふれてみる。現在、技術革新にもっとも影響をもたらしているものは労務事情であろう。これにコンピューターによる技術革新(コンピュートロニクス)と大きな要素になっている。とにかく、生産性をあげるためには、できるものはすべてとり入れていこうというのが現在の姿勢でもある。新聞社は競争の激しいところなので、新しい技術は早くとり入れていく傾向がある。

例えば、文字印刷のコールドタイプ化。いまのところ全面移行はしていないが、これも早晚、一般印刷への影響もでてこよう。まず毎秒数百本というスピードで組版するコンピューターシステムの導入は、当然その空き時間を利用して一般需要への姿勢もでてこないとはいえない。可能性として十分あるわけである。

さらにコールドタイプ化の方向で、活字業

界、広告製版の分野でみられるような影響も見落せない。ぼう大な活字の使用量が減ることは説明するまでもない。また広告製版でも、従来のように紙型鉛版、凸版という工程がフィルム化されるわけであるから、主導権の位置が変わることになる。

以上の例でもわかるように、新聞社における変革がもたらす一般印刷への影響というものは少なくない。

コールドタイプ化の方向

コールドタイプシステムを導入していくことは、印刷にとって単に製版部門における変化や影響ばかりでなく、印刷分野でも大きな影響をもたらすだろう。

コールドタイプ化すれば、フィルムでアウトプット（原版化）されることにもなるので、ダイレクト（直接的）に版がつくれるというように、とくにAPRなどのような感光性樹脂版の開発が大きなウエイトを占めてこよう。既存のものでは頁当たり4～8千円とまだコストが高くて問題であるが、しかしここでは考え方を多少変えていく必要があるだろう。これからも版材の開発、あるいはコストも安くなるということは考えられるが、それにしても安い便利だというように、コストならコストの面だけで一方的に物を考えることは危険でもある。これからの社会で、作業方式をどのように変えるかは、コストが安いという点ばかりでなく、高熱や重要作業（鉛版や活字を扱うこと）から解放し、働きやすい職場を作っていくなくてはならない。人手不足、省力化という面からも考えなくてはならない。むしろこうした要請が、作業方式を変える大きな要素になる。

いずれにしても、結論的にいえば、ここ3～4年間で最大の激動期になるものと考えられる。以上みてきたように、多様化する要素、可能性というものは十分にある。量もふえるが、質が変わってきているということで、この多様化にどう対応していくかが業界の今後にとってのポイントといえよう。

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆

パネラー 木下堯博

長谷川泰政

☆☆☆☆☆☆

考える要素が発展のカギ

画像再現（印刷）の方式を分類してみると、(1)機械的方法、(2)化学的方式、(3)静電方式の三つの方式になる。現在、印刷（画像再現）の主体的なものはもちろんその機械的な方法によっているわけであるが、このへんに焦点をあてて考えていかなければならないだろう。

まず、画像の再現は、点を集めライン化していけば文字表現となり、分散していけば画像を表現できるというように、この点の方式ですべて表現できるという考え方に立脚する必要がある。今後は社会の変革や情報量の拡大によるなどの変化により、工場というものも、これを処理、再現していくために「核化」していくであろう。当然この核化現象がおきれば従来のように、機械的な方式だけでは、この莫大な「情報」をこなしていけないことになる。化学的な方式、静電方式では、工程が短縮化されるが、なお品質に問題がでてくる。この点をどう解決し処理していくか、今後の技術革新の方向におけるポイントになるだろう。

今後の労働力・教育問題

労働力の変化、教育の問題については、つぎのような考え方をする。もちろん教育の問題も大きなことにはちがいないが、もっと重要なことは「印刷業界がどういう人材を必要とするのか」が問題であろう。

現状のように情報がはらんし爆発している時代に、また企業の形態がどうなるかわからないような状態のなかでは、分業化して企業内で育成していく必要があるのではないか。

つぎに問題なのは労働の質のことで、企業内で育成できる体制ができるかどうか、最大の問題であろう。つぎのところ、オートメーション化、合理化をすすめていく過程では、ブレン

だけでも仕事を進めてゆくことができる。つまり、人間の力としては「創造力」が大きくものをいい、また物を考えていく、そういう教育が決め手となってこよう。(木 下)

文字印刷では現状の反省も

出版印刷という立場から考えてみる。文字印刷の革新というものについて、現状をよく振りかえってみる必要を感ずる。例えば、コールドタイプ化の問題にしても、すでに第3世代機も実用化の段階にきているわけであるが、慎重、冷静に考えていくべきである。

需要構造の変化ということであるが、これは、単に新しい技術・機材の変化だけでもたられるものではないと思う。まず大衆がその有用性を認め、真にそれを欲する大衆意識の変化、それから真に需要構造に即した生産体制であるかどうか、さらに労働力の要素など、これらのものが結びあって、需要構造の変化というものが考えられるのである。

現在は、まだ活字が依然として主流を占めているように、完全に大衆意識としての主流の座は移行していない。したがって、第3世代機では、リーダーの問題、入力のカベがあるように、ここ数年間は第2世代機が主流を占めることになる。第3世代機が主流となる時期は、たとえば電波新聞の実用化される5～6年後と考えられる。つまりこうした電波新聞のようなものが一般に普及し、大衆意識に変化がおきてくる環境によってかもしだされるべきものであろう。

また、省力化という観点から現状をみていった場合、つぎのようなことも考えるべきではないか。つまり、従来のホットメタル(活字を使用する)方式でもっともネックになっているのは、差換作業のウェイトが大きいことではないだろうか。全作業(組版の)の6割にも達することすらある。まず、この最大のネックにいどむことである。

ひとつの方法としては、全自動モノタイプの利用の仕方がある。従来は、鋳植機としての利

用を考えてきたが、これは「テープを使うことを目的にすべきで、鋳込機を手段化」して考え利用していくことだと思う。(長谷川)

◇む す び◇

繁栄する企業の条件

武捨氏——労使関係の安定と人材開発。

(1)印刷は労使関係の安定化がポイント

印刷は受注産業であり、相手あっての商売である。技術・生産もちろん大事な要素であるが、発注側の要求に柔軟に対処していくには労使関係が円滑であることが第一のポイントだ。

(2)需要変化に対処すること

多様化に対処していくことが第一。そして、現在のシステムのなかでも高速化、合理化していくことを忘れてはならない。現実の合理化、省力化が大切なポイント。そして経営者ばかりでなく、若い人もどんどん海外に出すなどして、“時代”を経験させるなどして、人材開発をすすめ、企業の方向を誤らないようにする。

木下氏——さきごろ政府が放送大学の正式開校を打ちだしているように情報変化は必然な方向を示している。情報の爆発が見えている。当然業界としても、合併、提携の方向性がでてくるので、これにどう対処するかが問題。

長谷川氏——協業化の方向になる。

文字印刷の方向から考え、印刷全般の問題から考えても、コールドタイプ化、コンピューター化は必然的な方向をたどるだろう。

(印刷新報11月3日号より転載)

◇次期総会は横浜◇

来年度の定期総会は神奈川正和会をホストとして、横浜で開催することになった。

機関誌「緑友だより」第18号

昭和44年12月5日発行

編集責任 幹事長 大川 英 郎
発 行 全国印刷緑友会事務局